提出締め切り: 帰国後１ヶ月以内　　提出先: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度　JASSO 派遣報告書

報告者氏　　長岡慶　　平成２２　年度（入学・編入）

1.研究課題：
東ヒマラヤ地域タワンにおけるチベット医学の実践に関する研究

2.派遣期間：
平成　２３年　８月　１９日　～　２３年　９月　２８　日　（　４１　日間）

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

調査の目的と方法

今回の調査は、薬用植物が薬となるまでの商品連鎖をたどり、薬用植物の段階での利用状況、薬となった段階での利用状況を具体的に明らかにすることが目的であった。その方法は、薬用植物の供給地タワンと薬の加工地ダラムサラ（チベット医学組織の中心拠点）の 2 地点にて（1）薬の材料となる植物種やその供給地・供給量・価格などの聞き取り（2）供給地の植生分布や人々の植物利用（3）人々の生活状況、の 3 点について調査することであった。

フィールドワークで得られた新たな知見

（1）に関しては、チベット医学組織における薬草供給のシステムにおいて各地の診療所に配置されたアムチが重要な役割を担っていることがわかった。タワンでは、アムチとともに一般の人々が薬草採集において協力関係にあり、牧畜民との物々交換もみられた。(2)・(3) に関しては、タワンの植生やアムチと村人の植物利用の違い、チベット領時代から続く村の自治制度について情報を集めた。今回のフィールドワークの結果、これまで診療の側面からしか見えてこなかったアムチという存在について、別の側面からとらえるきっかけを得ることができた。つまり、アムチはチベット医学理論に基づく治療者であると同時に、インド全体で展開するチベット医学組織の薬草供給システムにおいては薬草の供給者であり、またタワン社会においては協力関係や牧畜民との交換などのつながりと不可分なローカル存在としてもみることができるのである。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

タワン社会には、アムチだけでなく、仏教僧やシャーマン、民間治療者が存在し、それぞれが地域の医療を担っている。しかし、今回は植物利用に焦点を合わせていたため彼らの実践は調査対象から外してしまった。今後、現地の人々の視点により近づいてチベット医学の実践やタワンの生活を描くためには、他の治療者たちについても、その特徴を調査し、アムチとの相違点や類似点、現地の人々がそれぞれの治療法をどう利用し選び分けているのかを調査する必要がある。

これからは、タワンでのフィールドワークを重点的におこなっていく考えである。また、これまでチベット医学を知る上で重要なチベット語を学習してきたが、タワン県全体で公用語となっているヒンディー語や人々の日常言語であるモンパ語についても、インドへ長期滞在しながら学習を進めることが課題である。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

フィールドワークをする機会が得られて、予備論文を書くうえで非常に役立った。フィールドに行きたくてもなかなか行けない人が多いと思うので、そういった人たちを支援するこのプログラムをこれからも続けていってほしい。

署名